

### 國務長官の交代

半年程前に就任した現ローマ法王フランチェスコの下、教会の刷新活動が推進されている。その中で一番注目されていたのが國務長官ベルトーニ枢機卿の交代である。法王就任後直ぐに新長官が発表されるのではないかとみられていた。しかし、発表があったのは就任後6カ月近くになる8月31日だった。後任は58歳のピエトロ・パロリン大司教だ。氏は2009年より在ヴェネズエラのヴァチカン大使だ。大司教は1955年1月17日イタリア国ヴィンチェンツァ県スキアヴォン出身。戦後としては一番若い長官である。10歳の時に父を亡くし、他の弟妹と同様に母親の手で育てられた。14歳で神学校に入学し、才能を表す。その後哲学と神学を勉強し、1983年28歳で教皇立聖職者アカデミーに入学。それから外交官の道を歩み始める。1989年ナイジェリア、そしてメキシコ大使となる。1992年にローマに戻り、ヴァチカンの國務省に入省。特にイスラエル、アラブの国々との各交渉に携わった。現法王とは数年来の知り合いだ。彼は「このことは法王の英断で、その恩寵を受けた。法王の私に対する信任に感謝する。これからは法王の意思に添い、法王の指導のもと最善を尽くしたい」とコメントした。國務長官は外務、内務関係の仕事をこなして来たが、これからは殊に外務関係に力を入れて行くということだ。彼に協力する4人の國務省職員も任命されたが、皆大司教クラスで、一人の枢機卿も入っていない。

ベルトーニ前長官はヴァチカンの諸問題の黒幕と思われていた。辞任に際しては、「私の7年間の在任中は、法王の手足となり、全力を尽くして来た。ヴァチカンの内部の問題に関しては、私はいろいろ噂されたが、私は法王の盾のように働いたのだ。殊にこの2年間『カラス』、『マムシ』と責められたが、それを乗り越えて来たのだ」という声明文を発表した。

交代の任命式は今年2013年10月15日に行われる。

### 中近東におけるキリスト教徒の難しい将来

アラビアの3大国において、民主主義の思想が宙に浮き、揺れ動いているようだ。民主主義は、シリアではアサド大統領によって否定され、イラクにおいてはイスラム教のシーア派とスンニ派が共存出来ず、相争うのみ、エジプトにおいては、軍の暫定内閣の発足で、どこかに行ってしまった。アラブ諸国では、複数主義、多様国家の存立というのが難しいようだ。イスラム教でもシーア派、スンニ派、無所属派、精神派、極端派と分かれているのに、そこへ民族主義が絡んで来て、共存するのが難しいようだ。そういう社会にあって、キリスト教徒の苦悩が理解出来るだろう。これらのイスラム圏の国々では、キリスト教徒の数は年々激減している。アラブの国で、コプト教徒を中心に一番多くのキリスト教徒を抱えているエジプトは、現在国民の10%がキリスト教徒だが、国の内憂外患で、キリスト教徒の将来は暗くなっている。イラクでの現状はもっと酷い。1900年代の初めには、国民の25%がキリスト教徒だったが、今は僅かに1%。また、シリアを例にとれば、1960年には国民の15%がキリスト教徒だったが、現在は多分6%ぐらいだろうと言われている。

さらに中近東の国々を見渡すと、キリスト教の存在の先細りが見えてくる。キリスト教徒の国民全体に対する比率は、トルコでは0.15%、アフガニスタンでは0.3%、サウジアラビアでは3.4%、イランでは0.2%、パキスタンでは2%である。USA OPEN DOORSの調査によると、1日に平均して、世界で、100人位のキリスト教徒が殺されている。キリスト教徒が迫害を受け

ている所は、少なくとも世界の60の国々を数えることが出来る。アラブ諸国におけるキリスト教徒の将来はかなり厳しいものとなるだろう。21世紀は中近東におけるキリスト教徒の終末となるのだろうか。このことは、アラブ・イスラム世界では大変な損失となるだろう。キリスト教徒は、それらの国々で複数主義の重要な要となるだろうし、全体主義に対する大きな保証となるだろう。

### 前法王の辞任の真相

去る2月11日、前法王ベネディクト16世は、ラテン語で突然の辞任を表明した。これに対して、世界のキリスト教徒を始めとして、多くの人々が驚いた。辞任の理由は「よる歳の波で、体力も気力も無くなりつつある中で、法王の任務をこなすことが出来なくなって来た。これは教会にとってマイナスとなるので、よくよく思案して辞任することにした」と発表された。

前法王はヴァチカン市国内の修道院のような所で生活しているが、極力隠遁生活を享受している。時には、そこで、非常に私的な訪問を受けている。もちろん、現在の教会のこと、教会の規律、内部の秘密に関しては一切口外していない。つい最近ある通信社の記者に会った時に、次のように語ったと言われ、公表された。「精霊は、自分の後継者の現法王を導くために、最大限の素晴らしさをみせてくれ、私は満足している。そして、私が法王を辞任したのは、神の神秘的出来事があり、神は『辞めていい』と言ったというのである。」

### 現法王からの突然の電話

現法王は、貧しい人のための教会、貧しい人の救済者になることを心掛けている。そのために、法王は、貧しい人、人間的に窮地に陥ってる人、種々の痛みを持っている人たちから、手紙を受け取っているようだ。その手紙を読んだ法王は、その人たちに、直接自ら電話を掛けているようだ。

そのいくつかの例を記そう。

- ・法王に選ばれた直後、長い間友達関係にあるステファニア・ヴァラスカとその家族に。
- ・大司教ローリス・カーボヴィツァ氏に電話をし、自分のために祈って欲しいと懇願。
- ・8月15日法王に直接手紙を書いたパドヴァの19歳のステファノは8月19日直接法王から電話を受けた。最初の時ステファノは家にいなくて、妹が受けたが、その後再度法王から直接電話があり、彼は感激していた。夢想だにできなかったことなので、彼は話の内容については公表しないと云っている。
- ・44歳のアルゼンチンの女性アレハンドラ・ペレイラさんに直接電話して、強姦されたことを警察に届け出た勇気を誉め称えた。
- ・自分の使用人によって殺されたアンドレアの死を悼んでいた兄のミケレ・フェルリに電話をして「痛みを分け合おう」と伝えた。
- ・8月27日午後4時頃、アンナ・ローマーナ(35歳)の携帯電話がなった。ローマ法王からだった。そしてローマ法王は次のように語ったと言う。「貴方は勇気がある。子供を中絶しないと決めたことは素晴らしい」と。彼女は35歳で未婚の母になるのだ。来年の4月が出産予定だが、彼女には子供の父親になる人が逃げたままにないのだ。そのことをローマ法王への手紙に書いたのだが、その勇気に敬意を表して、来年4月には「生まれて来るその子に個人的に洗礼を授けること」を約束してくれたと言う。

ヴァチカンのスポークスマンは、法王が個人的に電話をしていることについては我々の関与すべき事柄ではない。我々は法王の電話については一切知らないと言っている。